「潰瘍性大腸炎手記」匿名希望　35 歳

2012 年 3 月 14 日

発症

私の症状がでたのは24歳の時でした。
最初は下痢が2週間ほど続いたので、近くの診療所に診察に行きました。そこでは過敏性の下痢だろうと診断され薬をもらい帰りましたが、一向に下痢は治まらずひどくなる一方でした。この頃から便に血が混じるようになりました。大変な病気ではないかと心配になり、もう一度診察してもらい血液検査もしてもらいました。

（この文明社会には大変な病気などは一つもありません。ところがあらゆるマスコミを利用して権威あるとされている大学教授などが「怖い、怖い」と言い触れまわるものですから、無知な大衆はもともと医療に関しては完璧に無知なうえに、間違った情報をインプットされるものですから、体に何か変化があると大変な病気だと思い込まされてしまうのです。皮肉にもマスコミを利用した医療側の宣伝により“命よりも健康が大事だ”と思わせることに成功した成果が隅々にまでいきわたっているので、愚かな大衆はイチコロです。さらに医者に協力するのは行政ですから、医療行政に従事している役人たちも医療に関しては大衆と何も変わらない無知蒙昧な人たちの集団ですから、行政も悪乗りして朝から晩まで「健康、健康」と呪文のように唱え、「病気はまず医者にかかれ」と宣伝しまわっています。残念なことです。病気の定義も健康の定義も医学者の誰も正しくしていないのに、誤った病気と健康について医者が儲かるイメージが世界を支配しています。

実は病気は良いことなのです。なぜならば免疫が体内に入った異物を捕らえる力があることを証明しているからです。現代文明には免疫が異物に負ける敵は何一つありません。なぜならば現代文明は免疫が負けるような全てのウイルスや細菌を明らかにし、手ごわいウイルスや細菌が体内に侵入しないような衛生状態を確立した上に、人体に侵入する可能性のある怖い病原体に対してはワクチンを投与し、かつ抗生物質を投与し、さらに国民の栄養状態を常にチェックし免疫力を上げるようなシステムが出来上がったからです。

ただ一つ残念なことがあります。ウイルスだけは免疫力によってしか殺すことができないのですが、医者と製薬メーカーは共謀して日夜免疫力を落とす薬を不必要に患者に投与し続けるので、免疫が負けないウイルスにも負けてしまう人がいることです。だからこそできる限り医者に行くことを止めましょう。病院に行くことを止めましょう。さらに人間

ドックに行くことも止めましょう。元気である限り、知らぬが仏です。

この世に怖い病気は何もありません。癌もなるべくしてなるものであり、遺伝子の老化のために起こるか、生まれつき癌になるべく運命を持った人です。生まれつきの運命を決める遺伝子を変えることはできません。ステロイドや全ての症状だけを取る免疫を抑制する薬は、まさに一時的に遺伝子を変えることであり、いまだかつてステロイドで治す事ができた病気は何一つありません。なぜならば、症状がいかに不都合でも、遺伝子の働きは絶対なのです。この絶対な遺伝子の働きを変えることは、生命の全てが遺伝子の命令、つまり遺伝子の発現によって支えられている限り、生命の原理を根底から覆すことになるからです。つまり生命の活動が異常になるということです。従ってこの異常を回復するシステムが38億年の生命の進化の中で遺伝子に内蔵するようになったのです。これが遺伝子の修復です。ステロイドによって変えられた遺伝子を修復する仕事を25年間患者さんのお手伝いしてきたのが、松本医院の松本仁幸です。

私が25年間やってきたことは患者の病気を治しているのではなくて、薬や医者に障害を与えられた遺伝子の修復を手助けし、患者の遺伝子を正常に戻して、さらに敵を処理する手助けをしてきただけです。これがリバウンドです。リバウンドこそ見えない遺伝子の修復の表現形なのです。この意味を世界中の医者の誰一人も知りません。私がリバウンドをさせたわけではありません。患者さんの遺伝子が、特に患者さんの免疫の遺伝子が修復をやり、医者や薬で傷つけられた遺伝子を回復するまでがリバウンドです。その後病気を治すという働きが遺伝子の正常な働きなのです。人体の敵を処理する免疫の遺伝子の正しい働きは４つしかありません。敵を殺すか、排除するか、封じ込めるか、共存するかだけです。この正しい働きも世界中のどの医学者も知らないのです。残念です。彼らが信じているのは傲慢な実はできの悪い頭脳と優れた金儲けの才能を発揮しているだけです。残念です。）

血液検査の結果はＣＲＰ　0.3で少し炎症反応があると言われ一度大きな病院で検査を受ける事を進められました。僕は若いころから身体にこわばりがでたり、痛みがでたりすることが何度かあり、そのたびにＣＲＰが少し高いと言われていました。

（35歳のこの患者さんは既にリウマチもたびたび経験していたのです。皆さん、リウマチは一度症状が出れば、永遠に続くとお思いでしょうが、そうではないのです。本来人体に侵入してきた化学物質（ハプテン）を IgE で処理すべきものを IgG で処理してしまうことがあるのです。何がそうさせるのでしょうか？ステロイドホルモンです。このステロイドホルモンはどこから出るのでしょうか？ストレスです。ストレスがかかると交感神経が刺激され、戦いの最初の準備をします。続いてストレスは副腎皮質ホルモンを出させます。

なぜならば、交感神経は瞬発力はあるのですが、神経の興奮を長続きさせるようにはできていません。なぜならば神経のシナプスでやりとりされる神経伝達物質はすぐに枯渇してしまうからです。ところがホルモンは何日間も作り続けることができますし、かつ、このステロイドホルモンの情報は全ての細胞に伝えることができるのです。というのは、全ての細胞はステロイドホルモンに対する受容体があり、ストレスに対して全身的な戦いを準備しています。ストレスがかかると、大量に作られたステロイドホルモンが全身の細胞に行き渡り、全ての細胞の受容体に結びつくと、戦いのために必要なブドウ糖も大量に作られるのみならず、目の前の心のストレスに全身的に戦いやすいように心の戦いに不必要な戦いを全てシャットアウトするのです。もちろんシャットアウトされる戦いの一つが肉体の敵である異物との戦いも含まれます。数多くのこれらの異物との戦いを一時的に停止するために、様々な免疫に関わる遺伝子の働きを止めてしまうのです。AID 遺伝子の働きも止めてしまいます。この AID 遺伝子はまさに IgG を IgE に変えるクラススイッチの遺伝子であります。

ストレスに対する研究はハンス・セリエのストレス学説によって確立されました。セリエのストレス学説の中枢は、全身適応症候群と呼ばれるものでありますが、彼の時代はまだ免疫学が充分に研究されていなく、言うまでもなく遺伝学も確立されていませんでした。しかも彼は医者ではなかったので、私のように臨床とストレスと免疫学と遺伝学とを結びつけることは何一つできませんでしたが、ストレスが様々な病気の原因になるという事は知っていました。

私もストレスの多い生活をしてきたので、さらにアレルギーがありますので、ストレスが除去されホッとしたときに免疫の AID 遺伝子が回復し、何回も彼と同じようなリウマチのこわばりや痛みが出たことも経験しています。それでは、ここでこのようにストレスが解除された後にアレルギーではなくてリウマチの症状が出るメカニズムについて少し詳しく説明しましょう。

このメカニズムが発動されるためには２つの条件が絶対に必要です。まず第１に人体に侵入する異物が必要です。２つ目にこの異物を認識できる免疫の遺伝子が必要です。侵入してきた異物を認識できる免疫の遺伝子がある限り、必ずそれを排除しようとする免疫の働きが開始されます。異物を認識できる免疫の遺伝子を生まれつき持って生まれた人は、免疫の遺伝子が優秀であるのです。今さら述べることはないのですが、化学物質を認識しそれを IgE で処理するとアレルギーとなり、IgG で処理すればリウマチをはじめとする全ての膠原病になることは言う必要はないでしょう。これら２つの条件についてさらに具体的に述べましょう。

まず一つ目の化学物質であります。日本もアメリカも化学物質産出国家の代表です。かつ化学物質消費国家でもあります。アメリカでは国民の12人に１人がリウマチを代表とする膠原病であり、女性の９人に１人は膠原病といわれています。なぜアメリカは日本よりも膠原病が多いのでしょうか？一言で言うと、ストレスが多い国であるからです。日本よりストレスが多い根拠を具体的に説明しましょう。まず貧富の差が日本の何千倍もあります。１％の富裕層が99％の貧困層を支配しているといわれています。

次に日本は社会保障がアメリカよりもはるかに拡充しています。どうしても食えなければ日本では生活保護を貰えば生きていけます。日本は単一民族国家といえますが、アメリカは人種のるつぼを超えた雑種民族国家です。日本は少子高齢化の先頭を切っていますが、人口が減るという事は国の衰退に繋がりますが、それでも移民を認めようとしません。それは移民を入れてしまえば国民のストレスが増えるからです。

次に宗教を見てみましょう。日本は無宗教国家ともいわれていますが、宗教を熱心にやっている人は新興宗教だけです。アメリカは人種の数ほど宗教があります。宗教的な軋轢もアメリカは強いので、ストレスがアメリカ人の間に増えていきます。

さらにアメリカは世界中を支配する妄想に駆られていますから、常にあちこちで戦争を仕掛けています。これだけでもアメリカ国民にストレスが増えます。なぜならば若い人たちは戦争に出て行かざるをえなくなるからです。日本は平和憲法の第９条がありますから戦場に出かけることはないので、これだけでも日本国民の間にはストレスが少なくなります。

さらに日本人は和を大事にしますので、争いは好みません。一方、アメリカは200万人のインディアンをホロコーストして奪い取った国ですから、今なお銃器を自由に所有することができます。日本ではこっそり暴力団が保有しているだけですから、市民に殺される危険はアメリカよりもはるかに少ないのです。これだけでも日本人はストレスがありません。

さらに冷戦が終わってからのアメリカは、もともと金だけで動く国だったのですが、さらに金で金を生むという道に走りすぎて、ますます金持ちが金持ちになり、貧乏人が貧乏人になるというリーマンショックをとうとう起こしました。貧乏人がいかに頑張っても儲けられないので、さらに大多数の人にストレスがかかります。

結局は資本主義は金が全てを支配しているのですが、日本はユダヤ人のように「金、金、金･･･」と言い過ぎることはしません。やはり「金より大事なものがある」という長い文化風土の歴史がありますから、どこかに助け合いの心が残っています。ところがユダヤ人が

支配するアメリカは、いわばインディアンからの略奪を歴史の出発点としたうえに、金儲けとユダヤ教以外の歴史を持たないユダヤ人がアメリカを支配しだして、ますます誇るべき文化のないエゴイズムの社会となってしまっております。民主主義といったところで結局は金権主義に堕落しております。このような状況ではアメリカ人にストレスが多くなり、それに耐えるという事により貧困層は刹那主義的な快楽主義に追い込まれ、さらにストレスが高まり、それに耐えるために99%のアメリカ人はステロイドホルモンを出さざるを得なくなっているのです。もちろん永遠に肉体や物欲の快楽は続くわけではないので、心の幸福は長続きしません。その結果、現代のアメリカ人の膠原病の度合いは12人に１人になってしまったのです。

大量の化学物質とストレスが膠原病を生み出しているのです。日本もこれから衰退の道を進むにつれて不満が拡大し、それに耐えるために様々な膠原病が増えていくでしょう。そして治せる膠原病を治せない病気にしてしまうために、国民の幸せは減少し、かつ医療費も無限大に増えていくでしょう。医療費を“治してナンボ”という医療に変えない限りは消費税を20%にしようが30%にしようが、永遠にいたちごっこになるでしょう。37兆円の医療費を減らす方法はただひとつしかありません。病気を治さない限りは医者に医療費を払う必要がないという原理原則に立ち戻ることです。原因が分からないと医者が言う病気には医者は手を出してはならない。治らないという医者が言いきる病気にも医者は手を出してはならない。治せないのに副作用だけが出る薬を使ったら医者と製薬メーカーに責任を持たせる。余計な検査をやって病気が治らなければ検査代を返す。健康診断や癌検診をやりたい人は自分のお金でやり、公費は出さない。成人病は贅沢をし過ぎて作った病気ですから、成人病税をかける･･･などなどの具体的な医療政策を行えば、医療費は減る上に医原病がなくなっていきます。皮肉な言い方をすると、『病気にならないためには医者と関わるな。』という事になります。

本論に戻って２つ目の免疫の働きについて簡単に述べましょう。詳しくはここを読んでください。まず人体に侵入した化学物質は人体の結合組織のタンパク質と結びつきます。この化学物質をハプテンといい、タンパクをキャリアタンパクといいます。このハプテンとキャリアタンパクが樹枝状細胞や大食細胞に異物として取り込まれます。この異物はこれらの細胞の膜の表面にある TLR というレセプターに結びつくと、IL-12や TNF-α のようなサイトカインを出して未熟な T リンパ球を刺激して、ヘルパー１T リンパ球に変えます。このヘルパー１T リンパ球から IL-2や IF-γ などのサイトカインが作られ、これらが B リンパ球に結びつき、リンパ球に IgG を作らせます。この IgG が初めに述べた化学物質とタンパク質と結びつき、この IgG と大食細胞や好中球が結びついて、これらの化学物質とタンパク質の複合体を大食細胞が食べて殺そうとします。このとき大食細胞から様々な人体の組織を傷つける酵素や炎症産物が放り出され、近くの結合組織が破壊され、かつ発痛物質

も放出されて痛みも感じたりするのです。

ところがIL-4というサイトカインがIgGを作っているBリンパ球にひっつくと、AID遺伝子がONになり、作る抗体をIgGからIgEに変えるのです。作られたIgEは今度はさっき述べた同じハプテンとタンパク質の複合体と結びつき、さらにこれらが結合組織に大量に存在している肥満細胞に結びつくとヒスタミンが排出され、アレルギーとなり痒みが出るのです。これがBリンパ球のIgGからIgEへのクラススイッチの意味であります。ここで問題なのは、どのようにしてIL-4が作られるのかということであります。これについて説明しましょう。これに対する答えは10年以上前から私にとって非常に大きな問題でありましたが、とうとう見つけ出しました。今から述べる発見も、やっと最近私が世界で初めて見つけ出した大発見です。長い間の疑問がやっと解けました。ユーライカ、ユーライカと叫びたくなります！

実は肥満細胞にはIgEと結びつくレセプター以外にIgGと結びつくレセプターをも持っています。これはかなり前から知っていたことでありましたが、この意味づけができなかったのです。Th1細胞により刺激されたBリンパ球は、まず最初に化学物質に対してIgGをどんどん作ることは述べました。この作られたIgGは血管の多い結合組織にいつも大量に存在している肥満細胞と結びつきます。この刺激によって肥満細胞はIL-4を作り始めます。徐々に作り出されたIL-4は骨髄で作られたばかりの未熟なT細胞に結びついてTh2細胞に分化させます。ここで本格的にTh2細胞はIL-4を出してBリンパ球にIgEを作り出させます。どんどん作られたIgEは肥満細胞のIgEレセプターと結びついて、痒みの原因となるヒスタミンを出させ、本格的なアレルギーの症状が出てくるのです。

これを実証する例がいくらでもあります。私は耳鼻咽喉科も内科も標榜しています。他医院でかかられて治りきらない風邪の患者や中耳炎の患者が土曜・日曜に後始末に来られます。必ず前医で抗ヒスタミン剤や抗アレルギー剤を出されています。風邪や中耳炎はウイルスや細菌によるものですから、なぜ抗アレルギー剤や抗ヒスタミン剤を出すのかが長い間わからなかったのですが、私以外の医者は根本治療は全く興味を持っていないので、ただ症状を取れば患者を満足させお金を儲けるために余計な薬を出しているだけだと理解していました。

ウイルスや細菌を最後に殺すのは、患者自身の免疫が作ったそれぞれのウイルスや細菌に対する特異的なIgG抗体でありますが、このIgG抗体が上に述べたメカニズムによってアレルギー症状も出るものですから、彼らは原理を知らずしてアレルギーも抑えていたのです。彼らは経験上、抗アレルギー剤を出すことで風邪の際のくしゃみや喉の痒みが軽減することを知っていたのです。長い間私が感じていたこのような疑問もやっと解けました。

以前もなぜ風邪のときに抗ヒスタミン剤を出すのかと友人の耳鼻科医に聞いたのですが、誰一人答えることができなかった疑問でした。もちろん風邪のときにこのような抗ヒスタミン剤を出すことは許されないのは今さら言う必要はないでしょう。）

今日はここまでです。2012/03/22

その後、紹介状を書いてもらい大きな病院にいきました。この頃には少し下痢は治まりかけていましたが心配なので検査を受けることにしました。検査は大腸の内視鏡カメラでした。当日の朝からスポーツドリンクのような下剤を２リットルほど飲んで腸の中を洗浄してから検査を受けました。僕は炎症があるせいか内視鏡カメラが痛みを伴いとても辛いものでした。内視鏡カメラではクローン病、潰瘍性大腸炎ともに代表される症状は見られず炎症の出ているところの細胞を採り細胞検査してからの結果となりました。

（大腸内視鏡カメラ検査は、患者にとってはなかなか厳しい検査です。私の治療で症状がほとんどなくなっている患者さんで、特疾の資格を得るために必要な検査を他の大病院でやった話を聞くと、大腸検査をやられた後に必ず症状がぶり返すようです。それは繊細な大腸の粘膜に固形の大腸ファイバーを入れると、しかも無理やりに入れるものですから、必ず粘膜に擦り傷ができてしまうからです。その傷の周辺に再び炎症が起こり、痛みや下痢や出血が検査後に必ず見られます。これも言ってみれば、検査による医原病といえます。現代医学は病気を治すのは二の次で、しかも治せない治療をやるだけですから、治らない程度を検査で調べる意味もないのですが、何処の病院もすぐに検査をしたがります。これも現代医学が検査医学で金を儲けようとする意図があるからです。

医学に無知な経済学者は、日本の経済を成長させるためには医療産業が大きな希望になっているように書きますが、彼らはバカですと、言いたくなります。経済学者も政治家と同じで、というよりも患者や素人と同じく、現在世界中で行われている医療の無駄を何一つ知らないのです。知ろうとしないといってもいいかもしれません。知ろうとしても、その情報は必ず医療の専門家といわれる医者を通じてしか入ってきませんから、真実の症状は伝わりません。いずれにしろ経済学者も医者が言う命や健康は金よりも大事だと思い込み、医者がやっている医療も全て正しいと思い込まされています。従ってクローン病や潰瘍性大腸炎は、医者が原因不明で絶対に治らないという限りは、それが正しいと思い込んでいるのです。

何も難病に指定されているクローン病や潰瘍性大腸炎に対してだけではありません。風邪ひとつについても症状がひどければ、経済学者も政治家も医者に行けというでしょう。これが間違っていることに誰一人気づいていないのです。つまり現代の医療は症状を取るだけで、結局は根本的に治せるのは自分の免疫の働きしかないことに誰も気がついていないのです。しかも症状を取るというのは、根本治療がされない限りは永遠に続くので、それまで医療費はどんどん高騰していくことに気がついていないのです。従っていかに検査

器具がIT化され、デジタル化され、さらに高度にされたところで検査代が高くなるばかりです。確かに医療器具製造会社が儲かり、GDPは上昇していきますが、病気を治す目的には何の役にも立っていないことに、経済学者や政治家は気づいていないのです。さらに医薬品の研究が分子レベルにまで進んだところで、結局は免疫の働きを傷つけるだけですから、ますます命を守る免疫の働きがなくなり、根本治療をやってくれる免疫の遺伝子まで傷つけられ、薬代が高くなるばかりで、GDPはさらに追加されますが、高くなればなるほど国家の財政赤字は増大し、最後は社会保険医療も破綻せざるを得なくなるのです。

例えばクローン病や潰瘍性大腸炎で用いられる分子生物製剤といわれるレミケードなどは、一回投与すると25万円以上かかるようです。しかも免疫の働きの出発点となるサイトカインの中で最も大事な仕事をするTNF-αの働きを一時的に抑えるだけですから、死ぬまで続ける必要があります。しかも２～３年繰り返して使うと、この薬に対する抗体を患者の免疫は作り始めますから、ショックで死ぬ人が出てきます。さらにTNF-αは本来癌も殺すことができるので、その働きを抑え続けると癌もできやすく、何年後かに出てくるのです。このような症状が出たときに、さらに医原病の治療をする必要があり、またGDPが増えます。しかしながらこのお金は誰が負担するのでしょうか？国家であります。日本の国家の赤字財政は1000兆円を超えています。ますます国家財政破綻へと突き進んでいます。このような状況を経済学者は全く気づいていません。アホです。と言ったところで、経済学者は経済学の“専門家”ですから、政治家も一般大衆も経済成長のアドバイスは経済学者も求めざるを得ないというのが現実です。

なぜこのような愚かなことが永遠に続くのでしょうか？医療の目的は病気を治すことですから、原因が分からないとか、治せないとか医者がハナから診断を下す病気に対しては治療行為を止めさせるべきです。もっと分かりやすく言えば、人間を自動車並みに扱うことです。自動車が故障し修理工場へ持っていったときに、故障の原因が分からない、直せない、と言われたときに、自動車の持ち主はどうしますか？治すことを諦めるでしょう。よしんば「原因が分からないし直らないが、自動車を触らせてください」と言われて預けて修理ができなかったときに修理屋にお金を払いますか？絶対にしないでしょう。この原理を人間の病気に当てはめればよいのです。死なない限りは全ての病気は自分の免疫で治す事ができますから、そのときだけ腸管を切ったりステロイドを入れても病気そのものは治るどころか、さらに故障が増えているだけですから意味がないのです。ただ生死が危ぶまれるときには、命を取り戻すためにステロイドや手術は仕方のない医療行為なのです。自動車はオンボロになってしまえば捨て去ればいいのですが、人間はそうはいきません。命を取り戻す必要があるからです。

いずれにしろこの世に原因が分からない病気などは何一つないのですが、医学会が権威と権力を持ち続け、治る病気を治らないと彼らが言う限りは患者の不幸は永遠に続いてしまうのです。なぜならば医学会が間違いを犯しても、誰も責める人はいないのです。ただ例外が一人います。それが私です。といったところで私を無視してしまえばそれで終わり

です。例えば私が膠原病の原因が化学物質であるといったところで、医学会が膠原病の原因が分からないしらばっくれればそれで終わりです。その間、化学物質が原因である膠原病は世界中に広がり、間違った医療が永遠に広がっていっても誰も責任を取る必要はないのです。私を知らない限りは治る病気も治らなくされ、患者は不幸な一生を医者によって送らざるを得ない運命を不条理にも課せられ続けるでしょう。不幸を食い物にする医療界は永遠に繁栄していくでしょう。

皆さん、永遠に繁栄する医療のおこぼれを貰うためには、医者になることです。医者になって医療集団という特別の利権集団に入り込むために医者になりましょう！とりわけ頭が良いという自信があるにもかかわらず、安定しない職業に就いている秀才は今からでも医者になるのは遅すぎることはありません。頑張って医学部に入りなおしましょう！そして病気を作っても罰せられることのない医師免許を取得して、患者の不幸を拡大再生産しながら医者である自分たちだけは幸せになり続けましょう！と、頭は良くても金儲けが下手な方にこっそりアドバイスしておきましょう。ワッハッハ！！）

一週間後に検査結果を聞きに行くと潰瘍性大腸炎と診断されました。この時には症状は全くなく健康そのものでしたが、先生に治る病気ではないので特定疾患の申請をしてはと言われ保険所にいき申請をしました。その保健所の人にイロイロと話しを聞くと、自分の病状はとても軽いものだと思いましたが、そこでも治らないと言われ落胆してしまいました。特定疾患の申請は問題なく受理され医療費、薬剤費の負担は少なくなりましたが、申請をしてから症状が悪化する事がほとんどなくなり病院に通院することもしなくなりました。そのころは仕事も忙しく症状がない病気の事をあまり深く考えず、僕は治ったのだと本気で思っていました。（アレルギーも膠原病も同じ化学物質を排除するだけです。ストレスがかかるとステロイドホルモンが過剰に出され、IgG を IgE に変える AID 遺伝子が ON になりにくいことは既に述べました。リンパ球は毎日毎日１００億個以上も作られていますから、そのリンパ球の中にクラススイッチができないリンパ球が出てくると再び膠原病が出るのです。それも量が多ければ自覚症状が出ますが、少なければそれほど日常生活には問題がないこともあるのです。従って膠原病が治ったと思われるときもあるし、再び自覚症状が出て再発したと感ずるときもあるのです。化学物質がますます大量に生産され続ける限り、アレルギーになるか膠原病になるか、のいずれかになるよう人類は運命づけられているのです。化学物質の生産を止めなさいと叫んだところで可能でしょうか？無理でしょう。福島の原発事故についても、世界中が原子力発電を止めるか続けるかの岐路にたっています。高度な文明を続けるためにはエネルギーが必要です。化学物質を作り続けるのもエネルギーが必要です。人類は放射能で滅びるか、化学物質で滅びるかのいずれかの運命にさらされています。欲望が人類を高度に文明化させたのですが、この欲望が人類のみならず全ての生命の消滅を決めかねそうです。）

しかし仕事が多忙になってくるとやはりお腹に違和感を感じ始め、下痢になり最終的には血便を伴う下痢になる日がありました。ですが病院で処方してもらったペンタサを飲む

と2、3日で下痢も治まり薬があれば大丈夫と思っていました。１年に１度あるかどうかの症状だったので特定疾患の更新もせず、ペンタサがなくなれば病院に処方してもらいに行く、といった事を何年か続け病気と向き合うことをせず過ごしていました。（潰瘍性大腸炎の度合いも人様々です。ちょうどアトピーの度合いが人様々であるように。これはどうして起こるのでしょうか？一言で言うと、IgG や IgE を作る遺伝子の発現の度合いによります。この遺伝子の発現の度合いは生まれつきの遺伝子によって左右される異常に、エピジェネティックスなファクターにも大きく左右されます。エピジェネティックスという意味は､生まれたときに定められた３０億対の DNA の配列によって決められた遺伝子の設計図とは別に、遺伝子の発現に大きく影響を与えるメカニズムを研究する学問をエピジェネティックスといいます。言い換えると、遺伝子の設計図を実行に移せるかどうかの度合いを決めるファクターがエピジェネティックスなファクターといえます。つまり遺伝子の設計図は“生まれ”であります。一方“育ち”が後天的な環境であり、生活のレベルや人間関係や仕事の種類や心のあり方であります。つまり外部からの刺激の種類によって遺伝子の発現が変わるのです。化学物質の多い環境に住めば、アレルギーや膠原病の遺伝子が ON になりやすくなります。

さらにこの化学物質という刺激に反応するのは心であり肉体でありますが、とりわけ心や肉体にかかるストレスに対する反応を処理するためにホルモンが必要です。このホルモンの中で最も遺伝子の発現に関わるのがステロイドホルモンであります。このステロイドホルモンを現代人は生き続ける為に大量に出さざるをえなくなりました。このホルモンが IgG を IgE に変える AID 遺伝子を OFF にしてしまい、化学物質を IgG で処理しようとしてしまい、これが膠原病となるのです。潰瘍性大腸炎も膠原病の一つなのです。しかしながら消化器学会は潰瘍性大腸炎やクローン病を全く原因不明であると決め付け、絶対に治らないと冷酷な宣告を患者に易々と下してしまうのです。皆さん、医者が最も優秀で冷酷卑劣な人間性をどれだけ持ち合わせているかをお分かりになるでしょう。私に言わせれば、人間性というのは否定的な悪の人間性を指摘しているに過ぎないものですから、当然と言えば当然です。なぜならば人間性もエゴなる遺伝子に支えられているからです。）

悪化

発症してから5年が過ぎたころに病気の本当の怖さがやってきました。

いつものように違和感から始まり下痢、血便と悪化していきましたが、いつもの事だろうとペンタサを飲むだけでまた症状はなくなるものだと思っていました。ですがいつまでたっても下痢は治まらず酷くなる一方でした。その後、熱も出るようになり食欲もなくなり１週間以上高熱が続いたので、我慢出来ずいつもの病院に行くことにしました。

担当の医師に診察してもらい血液検査の結果や熱が続いている事から入院することになりました。僕は入院して治療すればすぐに元気になるものだと思っていましたが、全く熱

は下がらず辛い日が続きました。このころから関節が痛く腫れ上がるようになり自分で歩くことも出来なくなりました。このままではまずいだろうと医師にステロイドを処方する事を進められました。ステロイドが怖い薬なのはなんとなく知っていましたが、高熱が続く状況から逃げ出したくステロイド治療を承認いたしました。最初に処方されたステロイド量は１日プレドニゾロン80mg でした。ステロイドを飲むと数時間後には、歩けなかったのが嘘のように熱も下がり元気になりました。この時はとても素晴らしい薬だと思っていました。（70年以上前に初めてアメリカで合成されたステロイドは“ミラクルドラッグ”と呼ばれ、それこそあらゆる病気がステロイドで治ると喧伝されたものでした。この人工ステロイド合成に関わったヘンチをはじめとして３人がノーベル賞を受賞しました。ところが70年以上経った今でもステロイドで治った病気は何一つありません。ステロイドはあらゆる遺伝子の ON を OFF に変えて、免疫の働きを一挙になくしてしまいますが、無理やりに必要な遺伝子の ON を OFF に変えてしまいますと、必ず修復遺伝子が働き出します。すぐにではないのです。時間をかけてゆっくりとゆっくりと遺伝子の働きを戻していきます。これがリバウンドです。ところが70年経った今でもリバウンドのメカニズムを医学会が明確にした論文はひとつもないのです！皆さんおかしいと思いませんか？

実はステロイドよりもひどいことをやろうとしている人がいます。わが母校の京都大学の教授でいらっしゃる山中伸弥教授です。ステロイドでもその遺伝子を変えるメカニズムを公表できないのにもかかわらず、彼はもっととんでもないことをやっています。分化した線維芽細胞を山中因子という４つの遺伝子の ON を OFF にしてしまうステロイドの何倍どころか、何十倍、何百倍も遺伝子に影響を与える山中因子を入れて、再生医療と称して世間を賑わせています。彼が作っているのはとどのつまりは癌細胞であり、神なる遺伝子を自由自在に変えられるような幻想を振りまいて時代の寵児となっています。つまり iPS 細胞という“万能癌細胞”であります。遺伝子は神です。生命を支配している神に挑戦しているのが iPS 細胞です。山中大先生が偉いのか神が偉いのか、いずれ答えが出るでしょう。山中先生は神をも恐れない傲慢な先生だと私は考えています。悲しいことです。）

ステロイドは一週間おきに採取する血液検査の CRP の結果で量を減らしていく繰り返しで順調に減量でき、一ヵ月後には１日20mg まで減らせ、それと同じくして食事も少しずつ始まり無事に退院することができました。その後は２週間おきに通院し、血液検査をして少しずつステロイドを減量していきました。（ステロイドは神なる遺伝子を一時的には眠らせますが、そうは問屋は行かせてくれません。徐々に減らすといったところで、使ったステロイドの量にふさわしい ON を OFF にした遺伝子が大量にこっそりと人体の細胞に残されているだけなのです。残念なことにこの眠りは永遠に続かないのです。生きている限り、遺伝子の修復が起こります。修復がされない遺伝子をもった細胞は死んでしまいます。この真実を全世界の医学者が絶対に口にしない隠れた真実なのであります。遺伝子の発現が手に取るようにわかるようになった21世紀においても、ステロイドの作用を明らかにすることについてはタブーになっています。なぜでしょう？

現代の医療は一言で言えば、ステロイド医療であります。全ての薬はステロイドと同じように、遺伝子の発現を抑えるだけなのです。この真実が白日にさらけ出されますと、ステロイドがダメであるということは、他の薬も全てダメであることがバレてしまうのです。製薬メーカーがばたばたとつぶれ、世界中の医者も全て失業してしまうでしょう。こんな恐ろしいことを医学会のどんな勇気を持った人でも誰が言えるでしょうか？言えません。それをホームページで語り続けている松本仁幸という男は一体何者でしょうか？損得を全て忘れ去った真実だけを愛する狂人でしょう！ワッハッハ！！

病気を治すのは全ての人が持っている免疫の遺伝子の発現だけです。病気は免疫の遺伝子が悪いから出てくるのではないにもかかわらず、この遺伝子の発現を抑えようとする薬を使い続けているのが医者なのです。遺伝子の発現は絶対的に正しいのです。その遺伝子の発現によって現れる全ての症状は正しいのです。従って全ての病気は正しいのです。

言うまでもなく、成人病は人間の贅沢が作った病気ですから、贅沢を止めれば簡単に治ってしまいます。癌は病気ではありません。それこそ癌遺伝子が ON になり、他人に年よりは用がないからといって殺されないために、老人は自ら死んでしまう以外に道はないことを示しているだけなのです。正しい道です。老人の皆さん、若い人に迷惑をかけないで死ぬために癌になりましょう！老人の皆さん、遺伝子を子供に伝える仕事は終わったでしょう。迷惑をかけないで早く死んであげることが若者に対する義務です。年金の掛け金を少しでも若い人にプレゼントして早く死にましょう！私もいずれ癌になって喜んで死んでいくつもりです。

年金制度は破壊してしまっています。近頃どの病院も老人だらけです。家族はできる限り無駄な治療を望みます。私は病院の医師や経営者から最近こっそりギョッとするような真実を聞きだしました。無駄な検査をやり、無駄な医療を続け、無駄なリスペレーターを死にかけの老人に用い続けるのは、家族が年金が欲しいからだということです。この真実を最近初めて知りました。働かないで金が入る年金システムは誰のためにあるのでしょうか？年金を受け取っている老人の家族のためであることが分かりました。なんとおぞましい世界でしょう。国家財政は1000兆円の負債を抱えています。誰が公的年金を負担するのでしょうか？子供や孫です。日本はギリシャに近づいています。いや、規模はギリシャの10倍以上あります。国民の財産を全て没収する徳政令も間近いでしょう。）

半年ほどは何も症状はなくこのままステロイドは飲まなくてよくなるのだろうなと思っていたころに再び違和感が襲ってきました。直ぐに病院に行き診察してもらうとやはり CRP が上がっているのでステロイドの量を増やそうと先生に言われ、僕も早く症状を抑えなければまた悪化するのだと思い、ステロイドの量を増やす事を承認しました。このころは１日にステロイドを１mg しか飲んでいなかったので、10mg にすると直ぐに症状は治まり CRP も正常値に戻りました。（ステロイドは魔法の薬です。この魔法の薬を振りかざしているのは悪魔です。悪魔とは誰でしょうか？医者です！実は本当の病気を治す魔法の薬を持っているのは患者さんの免疫だけなのです。この免疫の働きをなくそうとしている悪

魔の薬を嬉々として全世界で用いているのは医者なのです。真実の魔法の薬を持っている免疫を懲らしめる医者という仕事は要らないのです。大学病院も大学の医学部も何も要りません。必要なのは患者の免疫の大切さだけを教える医学教育学部だけです。そうなれば私は医学教育学部の教授になれそうですが、私の医院もつぶれてしまうでしょう。病気がなくなれば、私の医院が消え去っても何の文句がありますか？大万歳です！）

ステロイド依存

本当の怖さはここからでした。ステロイドを徐々に減らしていくと症状が悪化するという繰り返しで、ステロイドから抜け出すどころか、徐々にステロイドが効かなくなっているような感じでした。（ステロイドが効かなくなるメカニズムを昔から考えているのですが、今のところ明確な答えは出ません。この答えを出すのは薬学者であり、かつ医学者であるべきなのですが、誰も研究しようとしません。研究はしているのでしょうが、おそらく表に出せないのでしょう。あえてそれでもステロイドの作用の一つの答えを出しましょう。長期に大量にステロイドを用いると、免疫に関わる細胞の遺伝子が無理やりにステロイドのために OFF にされても、それを修復する遺伝子が活動を始めます。この修復遺伝子はステロイドの影響を受けないと考えられます。この遺伝子が働き出すとすぐにステロイドの影響を除去しやすい免疫の細胞が増えてくるのではないかと考えています。今後の研究が待たれますが、そんな研究をやっても金が儲からないので誰もしないでしょうが。ところがもともと免疫の遺伝子の ON を OFF に変えるために作られたステロイドが、他の細胞の免疫に関係のない遺伝子の ON も OFF にするようになっていきます。

2003年に一人の人間に含まれている60兆の細胞の一つ一つに分配されている遺伝子の元になる DNA の塩基の数が30億対であることが明らかにされました。この DNA から成り立っている遺伝子も23000種類あることが分かりました。このうち10000種類が人間が毎日生き続けるために、常に遺伝子の発現を ON にしていることも分かりました。この10000種類の遺伝子をハウスキーピング遺伝子といいます。この遺伝子は全ての細胞が生き続けるために必要なポリペプチドやタンパクや、さらに遺伝子を発現するために必要な RNA をコードしている遺伝子であります。ところがステロイドが投与され続けると、正常な細胞の活動を保証する遺伝子の発現が障害され、下に掲げる様々なステロイドによる病気が生じてきます。まさに医原病であります。結局は組織や器官の細胞の遺伝子が発現できなくなった度合いによって、副作用の度合いが大きくなっていくのです。極端な言い方をすれば、大量のステロイドで細胞を殺し、人間を殺すことができるのがステロイドなのです。どれだけのステロイドを使えば下に掲げた副作用である医原病が出現するかも個人差がありますが、実は研究をすればすぐに分かることなのですが、金の儲からない研究は医学者は誰もしません。本当は患者にとって一番大事な研究であります。

◆ 副腎皮質ステロイド療法の副作用とその発症機序 ◆

臓器	副作用の症状	副作用が出現する発症機序
目	緑内障	眼圧が上昇し、視神経が障害され、視野異常が起こって失明原因となる
	白内障	水晶体繊維の凝固・壊死により、目に霧が射したりまぶしくなり、明るいところで見にくくなる
皮膚	創傷や術後の傷が治りにくくなる	繊維芽細胞の増殖が抑制され、膠原繊維が作られなくなりケロイド状態になる
	皮下組織のしなび、皮膚が薄くなる、皮膚が赤色になる	繊維芽細胞が膠原繊維を合成できなくなる
	皮膚が黒色になる	メラニン色素細胞がステロイドのために死滅し、内部のメラニンが皮膚に溜まるため
	ニキビ	ステロイドの持つ男性ホルモン作用と同時に免疫力が落ちる
	多毛	ステロイドの持つ男性ホルモン作用
筋肉	筋肉痛	ステロイドの免疫抑制のためにヘルペスが増殖し、ステロイドを止めた後の免疫とヘルペスの戦いのため
	筋萎縮	ステロイドのために筋肉のタンパクがエネルギーに使われるため
骨格	骨粗鬆症	骨のタンパクがエネルギーに使われ、骨の結合組織が失われ、骨のカルシウムが減るため
	脊椎圧迫骨折	カルシウムが減り、骨の構造が維持されなくなるため
	無菌性(虚血性)骨壊死 大腿骨頭壊死	ステロイドがエネルギーを作るために、脂肪組織から分解された遊離脂肪酸が骨端部血管内に脂肪酸がたまり、血流が途絶えるため
消化器系	消化性潰瘍 胃潰瘍、消化管粘膜出血、腸穿孔	ステロイドのためにプロスタグランディンが作られなくなり、粘膜の血流が低下したり、粘液産生が低下するため
	急性膵炎	プロスタグランディン合成抑制と脂肪塞栓、血行障害による
中枢神経系	精神障害、鬱状態、自殺企図、躁状態、分裂病様多幸感、異常食欲亢進、不眠、	神経伝達物質への影響、シナプスの神経伝達潜伏時間の延長、脳圧の亢進
	脳圧亢進、偽脳腫瘍症状けいれん、てんかん様症状	脳内の水・電解質代謝異常

循環系	高血圧、Na・水貯留、低カリウム血症、浮腫	軽度の鉱質ステロイド様作用により、ナトリウムが循環系にたまるため
代謝系	ステロイド糖尿、潜在性糖尿病が現れる	肝における糖新生の促進により、血中にブドウ糖が増えるため
	真性糖尿病の増悪	抗インスリン作用といって、細胞の膜の糖のレセプターが減るため
	糖尿病に際してケトアシドーシスの誘発	ステロイドのために糖尿病が悪化し、ますますブドウ糖が細胞で利用できなくなると、脂肪やタンパク質をエネルギー源として分解しなければならないときに、ケトン体が増えて血液が酸性になることをケトアシドーシスといいます
	高脂血症（コレステロール、TG増加）	ステロイドにより食欲が亢進し、高脂血症や肥満になる
内分泌系	成長抑制（小児）、月経異常・続発性無月経	ステロイドを多量に投与すると、ステロイドをコントロールしている間脳・下垂体はステロイドを作る必要がないと判断し、その働きを抑制してしまいます
	間脳・下垂体・副腎系の抑制、医原性副腎不全	ステロイドが外部から投与されるときに、下垂体が作るACTH、GH、TSH、ゴナドトロピンなどのホルモンが分泌する必要がなくなるため
	ステロイド離脱症候群の発症	これがリバウンドです。リバウンドについては書き尽くしています。
血管系	血栓促成、血栓性静脈炎	ステロイドは出血を止めるために凝固因子を増加させ、さらに傷を治すために必要な繊維層を逆に溶解させるプラスミン作用があるため
	塞栓、梗塞	血管内細胞が作られなくなり、血管壁が異常になるため
血液系	白血球（特に好中球）増加	好中球を多く作り、作った好中球を骨髄から末梢血管に大量に移動させるため
	好酸球・リンパ球の減少	リンパ球の遺伝子を変え、リンパ球を殺すため。アレルギー反応を抑えるため好酸球の生成も減らす
免疫系	免疫反応の抑制 遅延型アレルギー反応の減退	リンパ球・単球の減少、抗体産生の抑制、抗原抗体反応の抑制 ステロイドはまさに免疫反応を抑制するために使われることは言うまでもないことでしょう。
	各種感染症が誘発され、さらに感染症を憎悪させる 化膿菌、結核菌、真菌、ウィルス、原虫が増殖する	白血球・マクロファージの遊走抑制はもとより、全ての免疫細胞を抑制してしまうことも言うまでもないことでしょう。それによって感染症が起こりやすくなってしまうのです。

以上、以前ホームページ掲載したステロイドの副作用の表をかなり分かりやすく書き直しました。いずれにしろこれらの副作用は全てステロイドが遺伝子の発現を OFF にしてしまうからであることをもう一度確認してください。ステロイドが今まで病気を治した例は何一つありません。ステロイドは治療薬ではありません。ステロイドはあくまでも患者をだますための薬です。ステロイドを使うことが許されるのは生死に関わるときだけです。ステロイドは起死回生の薬としてしか使ってはならないのです。）

このころから精神的にも不安定になり、自分の将来が不安でしかたありませんでした。自分でも症状が出るのが怖くて仕方ありませんでした。仕事をしないといけないプレッシャーでお腹が痛くなったり、下痢をすればすぐにステロイドの量を増やして症状を抑える事しか考えていませんでした。このころは腹痛が出るたびに症状が酷くなる前に症状をステロイドで抑えた方がいいと思っていました。が症状はステロイドを増やしている間は治まるものの減らしていけばまた症状が出る繰り返しでした。それ以上にステロイドの量を減らせなくなってきている自分が一番怖かったです。でも病院の先生に難病で一生治らない病気なので仕方ないし、僕はまだ「ステロイドが効くだけいいよ」と言われていたので完全に諦めていました。そんな状態で退院してから４年間ステロイドを服用する日々が続きました。（この先生はいずれステロイドが効かなくなることを知っていたのです。お金さえ儲ければ患者がどんなに苦しもうが“我関せず”の態度です。悔しいですね。現代の医療がなぜこんなに堕落してしまったのでしょうか？金を持っている製薬メーカーが医者の良心を奪い取ったからです。医学者の真理を探究する責任や義務を奪い取ってしまったからです。私は何も特別な医者ではないのです。道理として38億年かかった免疫の遺伝子の働きを素直に理解し、素直に免疫の働きに従って潰瘍性大腸炎を治しているだけなのです。つまり私が治しているのではなくて、患者の免疫が治していることを誰よりもよく知っているだけなのです。なぜ私のような一介の開業医ができることが東大や京大の一流の医学部の教授ができないのでしょうか？私の知っていることを学問一筋である医学部の大学の教授が知らないわけはないのです。ただ金がもたらす快楽にまみれているだけなのです。どうしたら真実の医学が復活できるでしょうか？どうしたら私のように全ての病気を治せる医学を取り戻すことができるのでしょうか？私が治した患者さんがこぞって厚労省にデモをかければ変わるでしょうか？私には分かりません。一人ひとりの患者さんを治す以外にその問いに対する答えを私は持っていません。粛々と真実を遂行するだけです。）

出会い

完全に諦めて月１回通院しながら血液検査をして、その結果でステロイドを処方してもらう日々が続いていた時に、仕事関係の社長さんが僕の体調を気に掛け色々と難病につい

て教えてくれました。なぜそんなに詳しいのかは、社長の妹さんが病気は違いますが、長年難病で苦しんでいたそうです。が病院を変えたり食事に気をつけたり体を温めたりして自分に合う治療法を探して難病が完治したそうです。僕は全く他人事で信じていませんでしたが、直接、妹さんに会って話をすると「病気は絶対に治せる！！」ステロイドなんか飲んでいたらダメと言われました。ステロイドがよくないのは解っていましたが、病院で先生に言われることが一番の治療だと信じていました。（まさに難病であった社長さんの妹さんは自分の免疫で自分の難病を治したのです。そうです。難病を治すのには正しい道を知っている限りは医者は要らないのです。だからこそ製薬メーカーをつぶせ！大学病院をつぶせ！と言うのです。病気は患者さんが治すものです。病気は患者さんの免疫の遺伝子が治すものです。愚かな大衆はバカですから、病院の先生は偉いと思い込まされ、医者が薬が病気を治すものだと思い込んでいるのです。ところが社長の妹さんのように、医学を勉強しなくても病気を治すのは自分であることを知っている人もいるのです。だからこそ一番大事なことは、病気を治すのは自分の免疫であるという事を子供の頃から教え続けることなのです。免疫をおとしめない生活を教えることなのです。つまり病気を治す為に必要な教育だけを子供の頃から一貫して施せばいいのです。私はこの社長の妹さんの難病の病名を知りたいぐらいです。）

まず体を冷やさないようにして、冷たい飲み物も止めてストレスを溜めないようにするのと、漢方を勧められました。一度に全ては出来ないので、まず冷たい物を止め、体を温めることから試してみました。僕は小さい頃から体温が低く35℃前後しかなくあまり気にしてはいませんでしたが、それが悪いのであれば体温を上げる努力をしてみようと思い、体を温めるために岩盤浴が出来るベッドを購入して毎日温める努力をしました。すると最初は少しだるい感覚はありましたが、その後は体調もよくなり自分でも元気になっている感覚はありました。体温も36℃をきることがなくなり順調にステロイドも減らしていけるようになりました。ですがやっぱりそれだけでは治まるものではありませんでした。（体を温めることはまさに免疫がやってもらいたいと望んでいることです。だからこそ風邪を引くと熱が上がるのです。にもかかわらず愚かな大衆は解熱剤を薬局や医者から買い求めます。自分の命の泉である免疫の働きを傷つけていることを何一つ知らずに、であります。愚かな大衆は免疫のことを知るはずもないのです。愚かな大衆を責めるのは酷です。責めるべきは義務教育で行われている保健体育の教科書を作った先生であります。このような教科書を作るのは全て医者であります。医者は自分が儲からない真実を書きたがりません。もちろん保健体育の教科書を作らせる文科省の東大法学部卒の官僚は医学について何一つ知りません。教科書を書くことを頼んだ医学部の教授の前ではまるで赤子です。

皆さん、風邪を引くのも体を冷やすからではないでしょうか？だからこそ冬に風邪が流行り、夏も風邪が流行るのは冷房を使うからです。こんな簡単な真実も愚かな大衆は何も知りません。悲しいことです。正しい医学教育を小学校からやれと言っても、医者が儲かる教科書を作り続ける限りは永遠に正しい医学教育は不可能なのです。残念です。）

松本医院へ

ステロイドが１日７㎎になっていた頃にまた症状が出てきました。

でもステロイドを増やしたくはないので食事はせずに体を温めて免疫を上げれば症状は治まるだろうと自分に言い聞かせ10日程我慢をしていましたが、やはり我慢できるものではなく病院に行かないと、と思いましたが、またステロイドが増えるだけだろうな、嫌だな、と思った時に社長の妹さんに漢方を勧められたのを思い出して、インターネットで漢方治療をしている病院を探しました。

松本医院は１年程前から知っていましたが、その頃は漢方が効くイメージがなく、治療費が高くつくイメージしかなかったのであまり関心を持っていませんでしたが、「病気は絶対に治せる！！」と言われてから漢方も試してみようと思い、松本医院に診察に行くことにしました。幸いなことに僕の奥さんの実家の近くだったので前日から高槻に泊まり朝一番に診察してもらう事ができました。（私の事をかなり前から知っていたにもかかわらず、ステロイドをさらに投与を続けてきた患者がたくさんいます。だからこそ私のホームページを理解できるまで読んでもらいたいのですが、大衆は勉強が大嫌いですから、今までの既成のイメージで物事を決めてしまいます。愚かな大衆を責めたところで正しい医療が世界中に広まるわけではないのですが、わざわざ休みを返上して、できる限り患者に分かりやすく説明し、わざわざ良くなった患者さんに手記も書いてもらっているにもかかわらず、読まない人が多いことに驚かざるを得ません。

一番愚かな例があります。他の大学病院では原因が全く分からない、絶対に治らないと保証されているにもかかわらず、私の事を知っていたにもかかわらず受診しない患者がいることも知っています。本当に大衆はドアホです。私は原因も特定し、その治る理論も詳しく述べ、かつ治った患者さんの手記を公開しているにもかかわらず、病気を治せない大学病院を選ぶという患者の脳の構造を疑わざるを得ません。このような患者はそれこそ難病で死ななければ病気は治らないという絶望的な人たちの集団です。悲しいことです。）

松本先生に会うと「なんで１年前から知っていて来んかったんや！！」「ステロイドを４年も飲んでアホちゃうか！！」「ステロイドが欲しかったら他の病院に行ってもいいんやで！！」懇々と怒られました。でもその後「病気は病院の先生が治しているんじゃない！自分の免疫が闘ってくれているんや！だから薬で症状を消すのではなく免疫を高める為に漢方や鍼やお灸で手助けして治療するんや！あとストレスが一番ダメやからストレスを溜めないように！」と説明を受け最後に「病気は絶対に治るから！！」と握手をしてくださいました。その後すぐに鍼治療とお灸を受けて漢方薬とお風呂に入れる薬草を処方してもらいお灸も買って帰りました。（私は１年前から私のことを知っている患者さんに憤りを感じるのは、やはり患者の愚かさに対してであります。この手記を読んでこの患者さんの私との出会いまでのいきさつが詳しく分かったのですが、ますます腹が立ちます。患者さん

の無知に対してであります。患者さんに対して怒っているのではなくて、真実に対する無知に対してであります。１年も前に知っていたのに、１年後にしか来られなかったのは一体なぜなのかという憤りです。毎日毎日が真実に対する侮辱、患者の無知を利用してお金を儲け続ける現代の医療、挙げていけばキリがありませんが、本当に腹の立つ事が多すぎます。しかしこの現実は永遠に変わらないでしょうという絶望感で自分の心を慰める以外にありません。残念です。）

「ステロイドはどんどん減らしていくからリバウンドは覚悟しときや！」と言われていたのでビクビクしながら漢方を飲みはじめました。しかし僕は漢方が体に合うのか漢方を飲みだした初日から便の回数、腹痛が減りびっくりしました。しかしリバウンドは後からくるのだろうな、と思いながら漢方とお風呂とお灸を１週間続けた後、松本医院に電話して先生に調子が良いと伝えると10mg飲んでいたステロイドを５mgにしようと言われました。僕はこんなに早くステロイドを減らした事がなかったのでビクビクしていましたが、もう１週間が過ぎ症状も悪化することなく診察の日がやってきました。松本先生に状況を説明して色々話をしていると「君は目があかん！！僕を疑っている！！」と言われました。そんなつもりは全くなかったのですが自分があまり人を信用しない性格なのは事実だったかもしれません。（人を疑う事はもっとも心にストレスがかかります。猜疑心の強い心はそれを支えるためにステロイドを必要とします。私は人の心を患者の目を通して知ることができます。私は常に自分の心にある邪悪さを見つけ出し、排除する努力を毎日毎日、瞬間瞬間行っています。だからこそ私の心は明鏡止水と言ってもいいぐらいに、他人の心を映し出す自信があります。だからこそ患者に言います。疑っている限りは来るなと。君の心が病気を治せなくしているからだ、と常々患者に言い続けています。その疑いを持たないためにこそ私のホームページを何十回、何百回と読み返してもらいたいのです。それでも理解できなければ当院に来る必要はありません。なぜならば疑いが病気を治せなくしてしまうからです。）

それから仕事でのストレスの話や今までの病気の話をしていくうちに、松本先生が真剣に病気と向き合ってくれている事にきづきました。今までの病院は血液検査をして薬を処方してくれるだけで先生と話している時間はせいぜい３分程でした。しかし松本先生は「病気の事を理解しなさい！心と体は繋がっている！だからストレスは絶対にダメや！」と教えてくれたのですが自分でストレスを溜めない方法が分かりませんでした。が松本先生の思いがけない言葉が僕を救ってくれました。「自分に期待するな！諦めろ！」他の人に当てはまるかわかりませんが僕には忘れられない一言でした。（私は15歳までは秀才の誉れが高い男でした。様々なハンデがありましたが、全て自分の才能だけで勉強もしなくても自然に自分の能力を発揮できました。15歳まではナルシシズムの権化でありました。ところが小学生の頃に右目に当たった硬球のために、強度な右目視力低下と偏頭痛が中学3年生ごろから始まりだしました。高校に入ったときには頭痛と不愉快さと眠気のために、天国から地獄へと落ちていきました。15歳からは20年間苦しみました。常に自殺を考えていました

が死ねませんでした。自殺できる人はエゴを乗り越えた勇敢な人であります。私はそのエゴを放擲することができませんでした。しかしながら、どん底の中で心を見続けました。だからこそ人の心も見る事ができるのです。

人間の心に響く言葉は人さまざまです。彼に対しては「自分に期待するな！諦めろ！」という言葉が琴線に触れたようですが、要するにエゴを捨て去れということと同義語なのです。全てのストレスの原因はエゴを満たそうとするからです。はじめから自分自身を買いかぶらなければ、つまり自分のエゴを評価しすぎなければ自分に期待する必要もないのです。従って期待する必要がなければ不平不満も出ませんし、自分を責めるストレスも消えてしまいます。ましてや自分を評価する以上に他人から期待されても応答する必要もなくなるのです。従ってますますストレスが減ります。つまりストレスに耐えるための副腎皮質ホルモンが減ってしまうので、膠原病はアレルギーに変わり、最後は免疫寛容を起こしてしまうのです。そして化学物質と共存が可能となるのです。）

それから自分でもびっくりするぐらい精神的に楽になり病気にも前向きになりました。１週間ごとにステロイドを半分にして3回目の診察の時にはステロイドがなくなりました。その後少し頭痛や倦怠感はありましたがすぐになくなり、アトピーのようなものが顔に出てきました。まさかリバウンドもなくこんなに早くクラススイッチするのか？と思い早速、松本医院に電話をして先生に症状を説明すると「それはクラススイッチや！！」と言われ無茶苦茶に嬉しかったです。ここまで２ヶ月弱で血液検査の結果もみるみる良くなり下痢、腹痛、血便といった症状も全くなくなり初診から３ヶ月で「完治や！好きなだけ仕事しいや！」と松本先生に言われました。こんなに早く完治することはなかなか無いそうですが、自分でも病気が治って考え方や性格が変わったような感覚でした。（この患者さんは一度真実を知ってしまえば骨の髄まで行き渡る男です。しかもぶれなくて、その真実を実行できる素晴らしい男です。膠原病を治せない人たちは、結局のところアホで性格が素直でない人です。その自分のアホさ加減とエゴの強さに気づいていない人です。この患者さんはまさに自分の愚かさに気がついて、正しい心のあり方に心をスイッチするだけで肉体の免疫もクラススイッチを行い、アトピーが出現したのです。素晴らしい男です。私は初診から患者さんに怒鳴りつけることがあります。従って邪悪な患者さんから反感を買うことがあります。そのような患者とははじめから縁がありませんが、途中で私の真意を理解してくれる人がいます。その一人がこの患者さんです。医者は病気を治す事が義務であり責任であります。男の道は義務と責任を果たすために仕事を貫徹することです。私はそれを朝から晩まで毎日やっております。今後もやり続けるつもりです。）

僕にとっての病気

病気になって辛い思いも沢山ありましたが、僕にとっては大切なものを教えてくれ、自分の体が悪いんじゃないと教えてくれた気がします。松本先生に出会っていなければ今で

も病気で苦しんでいたと思います。今までの僕は体調が悪くなるとすぐに薬をのんで症状をおさえ仕事一番でやってきました。なんて弱い体なんやと自分でも嫌になっていましたが、そうではなく自分の考え方、生活習慣が病気を作っていただけだったということが解り、今までの自分がどれだけ体に無理をさせていたかにきづきました。皆さんも病気なってしまったと思うのではなく、自分の免疫が戦っているのを病気が教えてくれているのだと思います。だから諦めず「病気は絶対に治る！！」という言葉を信じて病気と向き合ってください。

（おおー！素晴らしいエピローグです。医者たちがあらゆるマスコミを利用して嘘ばかり教えてきたので、その間違いに気づくのにかなりの時間と努力が必要ですが、この患者さんはそれを短時間でやってのけてくれました。私は世界で一番悪い人間が集まっている利権集団は、医療集団だと考えております。嘘つきで、権威主義で、拝金主義で、冷酷で、偽善者で、ナルシシズムで軽蔑すべき集団だと考えています。こんな真実を書き続ける限り、私の命も末短いことでしょう。私が誰かに殺されたならば私の生き方を笑ってください。「あの男は真実をしゃべりすぎた世界一バカな男だ、当然の報いだ！」と。ワッハッハ！！！！！

最後に医療で金を儲けることはできないのです。なぜならば全ての人間に生まれたときから与えられている免疫の遺伝子が全ての病気を治してくれるからです。にもかかわらず優秀な学生たちが医学部に行くのはなぜでしょうか？病気を治さなくても金が儲かるからです。残念です。）

2012/03/29